愚なるが故に道なり

奥井禮喜

第36回

国は人を以て本と為す 猶お樹の地に因るが如し

人間社会・組織においては、制度というもの――則・掟・定めが不可欠である。広く言えば、これは文化の表現である。動物には、群れて生活するものと、群れずに生活するものがあるが、人間は群れて生活する。群れにはなんらかの文化がある。群れるから文化ができるのか、文化があるから群れるのか、その辺り、しかとは分からないけれど、群れの一員たるためには文化を受け入れて生活しているはずである。

群れが継続して、文化が伝統となる。個体は文化・伝統を学んで群れの一員として認知される。群れは個体に対して常に教育を施すことになる。文化・伝統を具体的に表現したものの一つが制度である。制度ではないが、規範もある。電車のなかなどで、化粧するなどは制度違反ではないが、慎みがあるかないかの規範に照らして、眉顰める人がかなり多い。もっとも、顰めない人も少なくないから、顰める人が、ただ不愉快になるだけである。群れにはさまざまなサブカルチャーが存在する。

「個性的に生きたい」とは誰しもが願うことであろう。会社が新入社員募集で「個性派来たれ」などと檄を飛ばすことも少なくない。しかし、考えてみると、これも奇妙なものだ。そもそも百人百様、同じ人間が自分以外に存在しないのだから、存在していること自体がすでに個性的なはずなのである。どうやら、ただ存在するだけでは、個性的だと自己認知できないらしい。

ところで、無人島でたった一人存在するとして、個性的だとか没個性的だという問題は発生しないだろうと考えれば、個性的だと自己認知するためには、周囲の人々によって個性的だと認知されなければならないという理屈になる。そこで周囲の人々に認知していただくべく、唯我独尊「目立とう意識」を実践する。勢い余って暴走し、「ジコチュー」なんてことにもなるのだろう。

で、その個性たるや、いかに形成されるのか。つくづく考えるに、動物的本能の部分を除けば、この世に生を享けて以来、周囲からのさまざまの刺激をうけて、自分なりに消化吸収して形成されてきているのであろうから、そもそもからして、個性は社会という文化・伝統の影響なしには育まれないのである。かくして、個性は社会から生じ、社会においてこそ輝くのであって、個性は社会の「粋」でなくてはなるまい。

「自立」なる言葉もある。実際、親元を離れて、自前でなんとか飯が食えるようになると、世間的にはこれを自立と言うけれど、社会

というものを前提にして考えると自立なんて所詮できることではない。いくばくかの収入を稼ぐのも、社会のお陰であるし、稼いだお金で衣食住を満たすのも、またまた社会のお世話になるしかない。理屈では、本当に自立しているのであれば、お金など介在させずして、衣食住を実現せねばならない。そんな上等なことができる、いわゆる自給自足の人なんて、ほとんどおられまい。

政治・経済・社会に不満・不安、混沌、いろいろあるけれど、遥か来し方を顧みれば、やはり、人間社会は進歩してきたと考えたい。その社会組織なるものはまさしく巨大にして複雑である。巨大複雑な社会組織を維持発展させるのは、並大抵の努力ではなかろう。最近あれこれ発生する不祥事・事件・犯罪などを見れば、蟻の一穴、社会的大騒動になるのであって、自立せよと叱咤激励すると同時に、「社会的存在たれ」という言葉も合わせて疾呼せねばなりませんなあ。

またまた、社会組織ということになれば、やはり制度の重大性に気づく。さまざまな社会・組織において、制度を作る方々は、選り抜き、いわゆる選良である。選良が緻密な頭脳で四方八方に目配り気配りして制度を作ったり、改良したりなさるのだから、概して新しい制度というものは、立派なもののはずである。理屈によって構築される制度が、そもそもからして立派でないなんてことは、文句のための文句を言うのであって罰当たりであると批判されても仕方がない。

にもかかわらず、最近耳目にするのは、さまざまな制度に対する不信・不満の合唱である。不信・不満を前提として愚考するに、制度を作る人の制度になっているのであって、あまねく制度を受け入れるべき衆生の気風と合致していないのではなかろうか。箸の上げ下げ的制度を構築して「小さな親切ならぬ大きなお節介」と陰口叩かれないようにせねばならぬ。また、結構な制度は作ったとしても、その導入に際して細心の配慮が行われないと世間からぼろ糞言われてしまう。

人間は習慣の動物である。日常生活たるもの、日々一新というのは浪漫的な気分に過ぎず、ほとんどは飽きもせず習慣を繰り返す。日記に、今日もまた、昨日と同じ、書くことなしと書き連ねるほど安逸・幸福な状態は他にはなかろう。幸福とは、日々の習慣を繰り返して後悔しないことである、とも言える。習慣の変更は、それがどんな小さなものであったとしても、容易ではない。関係者が膨れれば膨れるほど困難さが増す。ご立派な制度導入に際して、少なからぬ障害が発生する事情を考えてみると、たとえば「いったい何が始まるのか」「自分は損するのではないか」「自分は相談に預からなかった」、果ては、「あいつが一人いい格好しやがって」なんてのもある。それが非選良意識というものだ。

最近、社会・組織における選良意識が気になる。「選良」の選良意識なるものは、「ジコチュー」と同一温床に見えて仕方がないのである。